

稲作情報



NO. 1

越後さんとう農業協同組合
電話番号(0258)41-2887

いよいよ27年産米の作付けスタートです！

平成27年 3月18日

2年連続で「1等級比率90%以上」を確保しよう！

H26年産米 格落要因	1位	心白粒：63.2%
	2位	除青未熟：10.9%
	3位	青未熟粒：9.6%

平成26年産米においては、「中干し開始の遅れ」や「不適切な穂肥対応」に伴う籾数過剰から、早生品種を中心に、登熟初期の高温・登熟期全般の日照不足による心白粒の多発生を助長する結果となりました。

心白粒の発生抑制のためには、『健苗育成による早期良質茎の確保』→『適期中干し』による生育量調節（適正生育量の確保）がたいへん重要です！

乳（心）白粒の発生要因

- 登熟期前半の日照不足、高温で多発
- 日照不足型では“籾数増加”で多発
- 玄米タンパク質含有量とは無関係

1. 育苗準備

品質・収量の安定のためには、適正生育量の早期確保が欠かせません。
“健苗育成”によるスタートダッシュが肝心です！

(1) 育苗ハウスの準備

- ◇ いもち病やばか苗病の感染源となる稲わらや籾殻は、育苗ハウス内・近辺から除去しましょう。また、育苗床土へのくん炭混和や育苗時の敷材としての使用は避けましょう。
- ◇ ビニールを早めに張ることで、ハウス内を乾かすとともに、ハウス内を暖めておきましょう。

(2) 育苗資材の準備

育苗病害発生防止のため、育苗資材の消毒を徹底するとともに、被覆資材の特性を理解した上で、的確な育苗管理をしよう！

① 被覆資材

時期	上資材	下資材	保温性・保湿性	注意点
出芽期	シルバーポルトウ#80	ミラシート	高	晴天時は温度が上がりやすい（※ミラシートの一重は特に注意）
		ラブシート		
緑化期	シルバーポリを剥ぐ（低温時は二重被覆）	ミラシート	低	乾きやすい
		ラブシート		

※ 被覆資材の特徴を理解した上でハウス管理を行うとともに、劣化による保温性・保湿性の低下はヤケ苗、発芽・生育不揃いの発生を助長するので、定期的な更新に努めましょう。

② 育苗資材の消毒

薬剤名	散布時期	留意事項
イチバン	土つめ前（育苗箱、出芽室、被覆資材等の消毒）	1 作業場などは清潔にしてから作業する。 2 イチバンの散布は資材が十分に濡れる程度とし、残液処理は種子消毒剤残液処理方法にしたがう。 3 湿熱消毒は蒸気出芽施設を利用し、60℃1時間以上の処理とする。
湿熱消毒		

(3) 野ネズミ対策

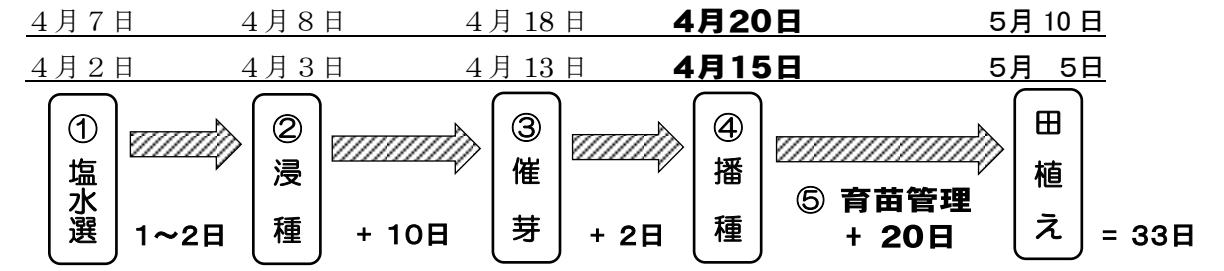
昨年、野ネズミ被害のあったハウスでは、忌避剤・殺そ剤による防除を徹底しましょう。畑や河川周辺のハウスは、特に注意が必要です。

2. 播種計画



ポイント 適期播種により軟弱徒長・老化苗を防止！

軟弱徒長・老化苗防止のため、「田植日に合わせた適期播種（育苗日数20日程度）による健苗育成」を徹底し、高温障害のリスク軽減のため、コシヒカリでは「播種期：4月20日以降、田植期：5月10日以降」を目安に計画を立てましょう！



無加温育苗の場合

田植え 月 日

【適期田植目標】
コシヒカリ
5月10日以降

播種 月 日

◇ 適期田植えにあわせた適期播種、適正な播種量の徹底による健苗育成に努めて下さい。

【健苗育成目標（コシヒカリ）】
播種期：4月20日以降
播種量：乾籾140g/箱（催芽籾175g/箱）
育苗期間：20日（加温18日）

60株植え（18箱/10a使用）の場合では、140g×18箱＝**種籾2.52kg/10a**必要です！

酒米等大粒品種の場合は150g/箱播きで！

田植日（予定）に合わせて作業計画を立ててみよう！

育苗期間 **20日**

催芽 月 日

期間：2日

◇ 催芽温度が30℃を超えると、細菌性病害が発生しやすくなるため、**催芽温度は28～30℃**を徹底し、**日数は1～2日**を目安として下さい。

◇ 「コシヒカリ」「五百万石」などの発芽しにくい品種は、**催芽不足にならないように注意し、必ず発芽状態を確認してから催芽を終了**して下さい。

◇ JAから供給される種子は温湯消毒済ですが、薬剤防除に比べ褐条病等に対する防除効果が劣ります。**全品種タフブロックによる消毒処理を行って下さい。**

使用区分	使用資材名	使用基準	備考
種子消毒	(温湯消毒)	-	60℃の温湯で10分、15℃以下の冷水で6分冷却処理
	タフブロック	200倍液に24時間浸種	いもち病・ばか苗病・苗立枯病ほか・催芽時

タフブロックによる種子消毒は、催芽前処理も可能ですが、催芽時に比べると効果が劣ることがあるため、**催芽時に使用して下さい！**

浸種 月 日

期間：10日

◇ 発芽揃いを良くするため、**浸種水温は10～15℃**とし、**十分な水量（種子容量の2倍程度）で積算温度100℃**を目安に行ってください。

特に、**浸種開始時の低水温（10℃未満）は発芽揃いを悪くするので避けて下さい！**

ポイント

塩水選 月 日

◇ より充実した籾を選別するために、**塩水選**を行ってください。

◇ 溶液の中に籾を入れる際は、籾についた気泡を落とすため、棒などでよく攪拌して下さい。

区分	比重	水100g当たりの食塩の量
うるち種	1.13	1.9 kg
もち種	1.08	1.1 kg

注）溶液の比重は比重計で確認する。
※ 塩水選後は“水洗い”を行う。

期間：**1～2日**

～～営農情報のお問い合わせは、お気軽に最寄りの営農センターへ～～
次回稲作情報：3月下旬「健苗育成のポイント（適期播種・ハウス管理）、作土深、基肥施肥」（予定）

新潟県「特別栽培農産物（米）認証基準」とJA越後さんとう「肥料・農薬 使用基準」

JA越後さんとう管内で生産される米穀は、使用する節減対象農薬・化学肥料（窒素成分）について従来（慣行）の栽培基準よりも「5割削減した栽培」に取り組みます。

新潟県における「地域慣行栽培基準」と「特別栽培農産物（米）県認証基準」

地域区分	品種 (適用品種)	節減対象農薬使用回数 (成分回数)		化学肥料使用量 (窒素成分 kg/10a 以下)	
		慣行栽培基準	県認証基準	慣行栽培基準	県認証基準
長岡地域	一般(下記以外の品種)	18回	9回以下	6kg	3kg以下
	早生(わたぼうし)	18回	9回以下	8kg	4kg以下

JA使用肥料の基準 → 「化学肥料使用量(窒素成分) 3kg(わたぼうし 4kg)/10a」の範囲内で栽培します。

使用区分	品目名	使用量の目安	化学合成由来窒素成分 kg/10a	成分(%)				摘要
				窒素	うち有機	リン酸	加里	
育苗	* 稚苗苗代配合	30g/箱	0.024	4		6	5	20箱/10a
	ホーネンス培土	2.8kg/箱	0.026	0.046		0.046	0.046	20箱/10a
	くみあい液肥2号	10g/箱	0.020	10		4	8	20箱/10a
	尿素46%	2g/箱	0.019	46				20箱/10a
基肥	* ほたる有機基肥	30kg	1.476	10	5.08	14	8	
	有機50スーパー元肥2号	40kg	2.360	12	6.10	7	6	
	有機50早生スーパー元肥2号	40kg	2.360	12	6.10	7	6	
	特栽米専用有機ペースト855	40kg	1.600	8	4.00	5	5	
	有機50ニュープレーバー10	35kg	1.750	10	5.00	4	3	
穂肥	* ほたる有機穂肥	25kg	1.210	10	5.16	4	6	
	さんとう穂肥有機	20kg	2.460	14	1.70	1	14	
	味好2号	20kg	-	7	7.00	2	7	
有機質肥料 その他の肥料 土づくりまたは追肥	ワールドエースペレット	30kg	-	4	4.00	5	2	
	発酵ケイフン	30kg	-	3.6	3.60	4.2	3.3	
	鶏ちゃんパワー	30kg	-	4	4.00	3	2	
	イセグリーン	60kg	-	3.03	3.03	4.71	3	石灰19.98
	シリカリユウ17	60kg	-					Si 17
	スーパーシリカプレミアム	20kg	-					Si 27
	PK08	20kg	-			20	18	
	苦土重焼燐	20kg	-			35		
	けい酸加里プレミアム34	20kg	-				20	Si 34
	塩化加里60	7kg	-				60	
マグコープ	20kg	-			17			
ウォーターシリカ	15kg	-					Si 17	
【例】	* 印を標準使用した場合の化学由来窒素		2.710					

※ 上記の使用基準を参考に、使用する資材のトータル化学合成由来窒素成分が県認証基準(コシヒカリ: 3kg)以下となるよう施肥設計を行って下さい。

JA使用農薬の基準 → 「節減対象農薬使用回数(成分回数): 以下の統一農薬9成分」の範囲内で栽培します。

◆【わたぼうし以外の品種共通使用基準】となります。

使用区分	資材名	用途	使用成分数	摘要	
種子消毒	タフブロック	殺菌	—	他の種子消毒殺菌剤との併用不可	
育苗	カスミン(粒剤・液剤)	殺菌	—		
育苗箱処理	フェルテラ(箱粒剤) ※1	殺虫	1	床土混和可能	
本田除草剤	初期剤	メテオ(1キロ粒剤・フロアブル)	除草	1	一発処理剤との体系処理
	一発処理剤	ウィナー(1キロ粒剤51・Lフロアブル・Lジャンボ)	除草	3	粒剤・フロアブル田植同時可能
	中・後期剤	クリンチャー(1キロ粒剤・EW・ジャンボ) ※2	除草	1	ノビエが発生した場合に使用
	中・後期剤	バサグラン(粒剤・液剤) ※2	除草	1	雑草が発生した場合に使用
本田防除	オリゼメート(粒剤) ※1	殺菌	1	いもち病予防対応	
	スタークル(粒剤・液剤10・豆つぶ) ※3	殺虫	1	共同防除(カメムシ等)	
			9		

本田防除 (緊急防除)	カスミン(液剤)	殺菌	—	いもち病(緊急防除)
	バリダシン(液剤5・粉剤DL)	殺菌	—	紋枯病(緊急防除)
	撒粉ボルドー(粉剤DL)	殺菌	—	稲墨黒穂・稲こうじ(緊急防除)

※1 Dr.オリゼフェルテラ粒剤でも可(床土混和は不可)です。ただし、単剤との重複使用は不可となります。

※2 クリンチャーバスマE液剤でも可です。ただし、単剤との重複使用は不可となります。

※上記以外の品目を使用した場合、一般米(JA米対象から外れる)の取り扱いとなります。

◆ 契約栽培わたぼうしの使用農薬基準

使用区分	資材名	用途	使用成分数	摘要	
種子消毒	タフブロック	殺菌	—	他の種子消毒殺菌剤との併用不可	
育苗	カスミン(粒剤・液剤)	殺菌	—		
育苗箱処理	フェルテラ(箱粒剤) ※1	殺虫	1	床土混和可能	
本田除草剤	初期剤	メテオ(1キロ粒剤・フロアブル)	除草	1	一発処理剤との体系処理
	一発処理剤	ウィナー(1キロ粒剤51・Lフロアブル・Lジャンボ)	除草	3	粒剤・フロアブル田植同時可能
	中・後期剤	スケダチ(1キロ粒剤)	除草	1	雑草が発生した場合に使用
本田防除	オリゼメート(粒剤) ※1	殺菌	1(必須)	いもち病予防対応	
	イモチエース(粒剤) ※2	殺菌	1(必須)	いもち・紋枯・墨黒穂病 防除	
	スタークル(粒剤・液剤10・豆つぶ) ※2	殺虫	1	共同防除(カメムシ等)	
			9		

本田防除 (緊急防除)	カスミン(液剤)	殺菌	—	いもち病(緊急防除)
	バリダシン(液剤5・粉剤DL)	殺菌	—	紋枯病(緊急防除)
	撒粉ボルドー(粉剤DL)	殺菌	—	稲墨黒穂・稲こうじ(緊急防除)

※1 Dr.オリゼフェルテラ粒剤でも可(床土混和は不可)です。ただし、単剤との重複使用は不可となります。

※2 イモチエーススタークル粒剤でも可です。ただし、単剤との重複使用は不可となります。

※上記以外の品目を使用した場合は、一般米(JA米対象から外れる)の取り扱いとなります。

平成27年産米使用基準の変更点について

作付け前にもう一度、「H27 肥料・農薬使用基準」の確認をお願いします!



① 本田初中期一発除草剤

- 雑草発生の状況および要因:【気象】小雪による越冬株の多発、消雪の早まりと4月・5月の高温条件による雑草の早発、除草剤散布時期の強風および消雪による拡散・効果の阻害等により、水田雑草が早発・多発し、中後期除草剤の使用率が平年より多くなっている

【ほ場・管理】ほ場条件(水持ち・均平)が悪い、水管理不徹底～田面の露出、散布時期の遅れ、アオミドロ・藻類の発生、特殊雑草(クログワイ・オモダカ等)の多発生ほ場

- ヤイバの課題: 散布時期が遅れると雑草の取りこぼしが多い、年々カヤツリグサ系の雑草(ホタルイ・クログワイ)発生が多くなっている、豆つぶ剤・ジャンボ剤の風による吹き寄せ、田植同時散布ほ場における雑草多発(残効期間)、フロアブルの剤型がない

- 雑草発生の要因・課題を踏まえ、本田初中期一発剤の切り替えに向けた現地試験を実施し、効果を検証
*管内35ほ場: 6品目(2成分剤: サンテツ・ホテ・ガード・ゼータファイヤ、3成分剤: ナギナタ・ウィナー・バツリ)
【試験結果】2成分剤よりも3成分剤の除草効果が安定しており、3成分剤の中で“ウィナー”の除草効果が高い → ウィナーに対する評価: *イプフェンカルバジン: ヒエに対する除草効果・長期残効、*プロモブド: カヤツリグサ科雑草(ホタルイ・クログワイ・ミスカヤツリ)に対する優れた除草効果を確認する

→ H27 使用基準の本田初中期一発除草剤は、3成分剤「ウィナー」を新規採用する

② 本田病害虫防除剤 … 除草体系で“プラス1成分” → 病害虫防除で1成分減らす必要がある

- ◇ 本田殺菌剤の利用率 → オリゼメート剤: 24.4% > イモチエース剤: 9.2%
- オリゼメート剤は、いもち病の常発地や転作あと・基盤整備あとの早生品種ほ場における葉いもち対策剤として利用されている
- イモチエース剤は、主にわたぼうしの墨黒穂病対策剤として利用されている

→ 薬剤の利用頻度・要求度を考慮し、H27 使用基準の本田防除にはオリゼメート剤を継続採用し、イモチエース剤を削除する → *わたぼうしの使用基準は、別途部会で設定

③ 中後期除草剤(わたぼうしのみ) … 墨黒穂病防除の必要性から、除草体系で1成分減らす必要がある

- 初期剤は、前年産のこぼれ粉対応、中山間地や用水条件不利地等での代かき後処理として必要性が高い
- 一発処理剤は、3成分剤「ウィナー」の優れた除草効果が確認されており、同剤を採用したい
- 中後期剤は、ほ場により発生する雑草種に差があり、ヒエ剤・広葉剤のどちらか一方を選択するのは困難

→ 墨黒穂防除の必要性から、H27 使用基準の本田防除にはイモチエース剤を継続採用し、中後期除草剤を1成分剤でヒエ・広葉に効果の期待できる「スケダチ」を新規採用する